

第3回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

(1) 協議事項

- ① サッポロサタデースクール事業令和4年度実施状況及び令和5年度実施方針について
- ② 学びに対する無関心層にどう働きかけるか

2 日時

令和5年(2023年)1月27日(金) 10時00分～12時00分

3 場所

S T V北2条ビル6階 教育委員会A・B会議室

4 出席者

(1) 委員(参加者計10名 対面参加9名、オンライン参加1名)

対面参加：鈴木委員、出口委員、一戸委員、臼井委員、高橋委員、安田委員、
中野委員、出葉委員、本間委員

オンライン参加：榊委員

(2) 事務局(7名)

木村生涯学習部長、村上生涯学習推進課長、逸見推進担当係長、釜石社会教育担当係長、中原職員、三津橋職員、横山職員

5 開催形態

公開(マスコミ関係者1名傍聴：北海道通信社1名)

6 会議内容

(1) 配布資料

資料1-1：「サッポロサタデースクール事業 令和4年度実施状況」

資料1-2：「令和5年度のサッポロサタデースクール事業は地域学校協働活動推進事業へと移行します」

資料1-3：「コミュニティ・スクールについて」

資料1 参考資料：「サタデースクール通信」

資料2 参考資料：「テーマ① 学びに対する無関心層にどう働きかけるか(前回会議のまとめ)」

(2) 協議事項

「サッポロサタデースクール事業令和4年度実施状況・令和5年度実施方針について」

ア 事務局から資料1-1, 1-2, 1-3 及び資料1 参考資料を用いて説明（釜石係長）

説明要旨

○サッポロサタデースクール事業 令和4年度実施状況について

- ①令和4年度実施校数
- ②事業推進に係る主な取組
- ③主な活動事例

○令和5年度実施方針

- ①地域学校協働活動とは
 - ・コミュニティ・スクール
 - ・コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の関係
- ②令和5年度 地域学校協働活動推進事業について

イ 主な意見・質疑応答

- ・「地域等の協力を得て育てたい子ども像（小中一貫した教育グランドデザイン）の実現」というところで、この「育てたい子ども像」という具体的なイメージ、例えば、ある地域では、働くことの大切さをしっかり自分が認識しているような子どもに育てるだとか、ある地域では、自由な考え方とか自由な発想を大切にするような子どもを育てるとか、地域ごとになってしまうようなことがイメージされているのか。（臼井委員）

→札幌市では、中学校区を構成単位として小中一貫した教育のパートナー校としており、このパートナー校単位で9年間でどのような子どもを育てたいか、地域の実態等を踏まえて目指す子ども像を定めて、共通の目標としている。その実現のための推進計画とか具体的な取組みをまとめたものがグランドデザインで、目指す子ども像は、例えば、人とのつながりを大切にし環境を愛せる子とか、自分は大切にされていると実感できる自己肯定感の高い子であるとか、本当に様々。ただ、その学校だけではなくて、地域の方にも、その地域で育てたい子ども像というのを共有してもらおう、コミュニティ・ス

クールは地域の方に参画してもらいながら、学校と地域の方と力を合わせて子どもを育てていくというものになっており、学校は、この立てたグランドデザインの目標を、学校だけで閉じず、地域も学校任せにせず、思いを共有しようと歩み寄る必要が出てくると考えている。グランドデザインを学校は地域の方に見せて、地域の方も積極的に学校を見せてもらって、思いを共有していただきたい。その上で、結局、もしかしたらこれまでと同じ活動をするのであっても、学校と地域が相互に意識を共有していることを実感することで、目指す子ども像の実現に効果があるというふうに考えており、地域によってグランドデザイン、目標が違うということは当然生じるが、その地域の中で、学校と子どもを育て支える地域の人々が、同じ目標に向かって、まずは子どもに目を向けて育てていこうと、そういったことをこの事業を通じて促していきたい。（釜石係長）

- 例えば、商店街地区に育っている子どもと文教地区に育っている子どもで、地域によって子どもの育て方みたいなことが変わってしまうような懸念はないのか。本来、子どもは、どういう環境やどういうところに生まれても平等であり、なおかつ、もっと大きな視野の中できちんとした価値観というのが育つべきだと思うが、地域色というのを出すのは大事だが、それが学校単位の地域という狭い枠の中で考えられていいのだろうか。（臼井委員）
- 資料1－3左の校長の絵のところに、学校運営の基本方針があり、これを承認するという役割があって、この承認された基本方針をベースにしながら、小学校、中学校が、小中一貫教育を進めるので、何校かでその教育目標もすり合わせするというか、一つの目標に向かってという流れが出てくると思う。この基本方針をベースにしながら、そのグランドデザインを考えていくということなので、学校が考えていることと全く違う方向のグランドデザインをかくということは余りイメージできないし、私が幾つも関わっているところでも、あくまでも基本方針をベースにして、15歳の姿をみんなで話し合っ、その実現のために何をすべきなのかというのが議論されているところが多いので、そんなに地域によっていろいろな違いが出てくるようなことは考えられないのかなと。やっぱり知・徳・体の柱のもとに基本方針というのは考えられていると思うので、そこから極端にずれるということは余りな

いのではないかと思う。（出口委員）

- ・地域の方々の協力とか理解をより深めて一緒にやっていくというようなスタンスのほうが強いのか。（臼井委員）
- ・そう。どちらかというと、基本方針や教育目標というものは、今まで、学校の先生はもちろん理解していて、子どもたちも目にしていると思うが、そこ止まりになっているところが多くて、では、保護者が学校の基本方針を知っているかと言ったら、全く知らない。まして、地域の人でも全く意識せずに取り組んでいられていると思う。けれども、この学校運営協議会で議論することで基本方針を承認して、一つの子ども像をつくって、そこに向かって取り組むというのは、皆さんの方向性を一つにすることになって、教育目標そのものがいろいろな方に知ってもらえるということにつながっていくのではないかなということで、目的を一つの方向に持っていけるということと言うと、意味があると思っている。（出口委員）
- ・では、もう啓発とか浸透も含めてやっているということか。（臼井委員）
- ・はい。コミュニティ・スクール学校運営協議会で議論したことをやっぱり地域の人らに伝えていって、こんなことを議論して、こんな方向性に向かってやっている。こういう子どもに育てるためにはこんな活動が効果的だから、この効果的な活動をするために地域の人に協力してもらいたいというのが、この地域学校協働活動というふうになる。（出口委員）
- ・現場の状況の補足をすると、今、中学校区で、中学校一つ、小学校幾つかでグループをつくって、小中一貫した教育に関するグランドデザインを、先ほど紹介あったような形で立てている。これはもちろん、その中学校区の地域性や環境固有のニュアンスももちろん入るが、大もとになるのが札幌市の学校教育の重点である「自立した札幌人」の育成であるとか、知・徳・体の調和のとれた育ちといったものが根本にあって、それでそれを地域に落としたときに、今うちの学校や地域ではどういったことが課題となっているのかというようなことを、今のところは学校関係で共有してグランドデザインを立てて、各学校ではホームページなんかにも上げて地域や保護者にもお知らせをしているという状況があるので、そこにはもちろん、グランドデザインを立てたときに、もとになるものは同じで、あとは、先ほどキーワードで幾つ

か出てきたような自己肯定感であるとか、主体性であるとか、あるいは、学校の立地によっては環境を生かしたとかというようなことが、地域の特性を生かしたものであったり、逆にその地域だからこそ課題になり得ることをそこに盛り込んだりするという意味では、全く地域ごとに同じにはならないとは思いますが、目指す大もとは同じであり、またその地域性や独自性を生かした部分、あるいは、それを補う部分というのがそこに入り込んできて、なおかつ、それを今後は、より地域の方々、あるいはCSであれば学校運営に携わる地域の方々に御理解をいただき、逆に声をフィードバックしていただいてブラッシュアップしていくというような動きになっていくということになると思うので、ばらばらになるという懸念ももちろんあるかもしれないが、独自性も生かしつつ、また、大もとになるものが一つになるというような大きな構造で考えれば、大丈夫なのかなと感じている。（出葉委員）

- ・根本はベースがしっかりあって、そういった中で地域の特色とかをいろいろ生かしながら、子どもたちを地域の中で育てていくというようなことでよろしいのでは。一番の特徴としては、地域の方と一緒にというのが、今回かなりこの仕組みの中で生かされるかなというふうに思っているので、その辺も、多分、育てていく中でというか、時間の経過の中でいろいろと醸成されていくのではないかなと思っている。（鈴木委員）
- ・地域の子どもの支援団体から一言言いたいのは、「育てたい子ども像」という言葉自体が入るとというのが、ちょっと考えがたい。うちとしては、育てたい子ども像の枠に入らない不登校の子どもたちを見ていて、そういった部分で、これが巷に回って、そういう子どもたちが見たときに、これはもう既に大人目線であるということで、その違和感が拭えないため、もっと違う言い方がないのかなと感じる。（安田委員）
- ・主語として、「大人たちが」みたいなのが入っているのではないかというふうに受け取られるということか。ただ、趣旨としては、多分、そういった多様な子どもたちを、共生できるというか、そういった地域をつくっていきたいということだと思うが。何かコメントは。（鈴木委員）

→一旦こちらで、育てたい子ども像については、今いろいろなニュアンスの言葉を使っており、今回、コミュニティ・スクールの在り方検討委員会で、メ

ンバーに、子どもの意見を取り入れるという趣旨で高校生の生徒にも入っていただいているので、いろいろな点でお話を伺いながら検討を進めたいと考えている。（釜石係長）

- ・サタデースクール事業について、先ほどお話にもあった南区の芸術の森小学校で私も初めて取り組んでみた。三つ企画して、今二つ終わっているところで、実は土曜日に開催した。そのときに感じたのは、いわゆる、土曜日に使うというところ、教師の負担感というところがやっぱり一番大きなハードルだった。その一方、コミュニティ・スクールを見据えた上で学校協働活動のことを考えると、地域の皆さんと、たった2回の活動だったが、とてもいい関係性ができた。質問としては、今、25協議会がやっているサタデースクール事業の中で、いわゆる地域がこれをやろうと言って手を挙げてくれた協議会は実際どれくらいあったのか。また、サタデースクールが今までやってきた事業を、コミュニティ・スクールのあり方が検討されている最中に、令和5年から1年前倒しでこの協働活動推進事業を、いわゆるサタデースクールではない形でやるのか。（中野委員）

→まず1点目の、地域発信でできているサタデースクールの運営協議会がどのぐらいの割合かというところで、今すぐの数字は持ち合わせていない。実は今まだアンケートを学校にかけており、集計されると見えてくると思っている。PTAからお問合せがあって実現したのが、今年度2校、お問い合わせがあったのが5校ぐらいあった。来年さらに1校していただけそうな予定。

コミュニティ・スクールを見据えた地域学校活動推進事業ということで、来年度は、事業内容が実はサタデースクールとほとんど変わっていない。今まで学習支援、体験活動、体力健康づくり、地域交流というメニューでやって下さいと言っていたものに、学校支援という項目を1個追加してもいいですよといったようなアナウンスで、これから広めていこうというふうに思っている。また、学校と思いを共有してという部分も、かなり、概念的なものになってしまうので、こういう部分が共有していますとか、そういうところを何か文書で求めるというよりは、こういう目標を持って、一緒にこれをしていこうということを合意していただきたいという気持ちの上での、地域学校協働活動とコミュニティ・スクールの一体的な推進に向けた促しを主

眼としているので、実は事業のやり方は変わらない。ただ、見せ方で、学校からも、きっと何か変わるのではないかと、変わり過ぎるのではないかと、違うことをやるのか、コミュニティ・スクールに向かって地域学校活動推進事業が全然変わってしまうのではないかとというような印象は、誤解のないように進めてまいりたいと思っている。コミュニティ・スクールが導入されるようになると、こちらの事業も中身や、やり方を変えていく必要が出てくるとは思っている。今、在り方検討委員会でどのようにコミュニティ・スクールを進めていくかということが決まっていくのと合わせて、大きな仕組みの転換というのは今後考えていく。（釜石係長）

- ・今言った説明は本当に丁寧にやっていただかないといけない。あくまでもコミュニティ・スクールに向けての、サタデースクールの、大きな流れはそんなのかもしれないが、熱心に地域の方々がやってくれたそのサタデースクールがコミュニティ・スクールの中に入ってしまうのかという懸念が出てくるのかなという気がする。今回このサタデースクールをやった上で、学校の休日利用というハードルというのもあったが、もう一つあったのは、現役PTAとの関係だった。今回、地域枠でサタデースクールをやりたいと言っている学校長と、かなり綿密に打合せをした上で企画を三つほどつくってやったが、現役のPTAとどう連携するかというのが、実は一つ悩み事になった。札幌市のPTA協議会としては、各区P連に対して、こういうサタデースクールがあるというのを、結構インフォメーションした。数字が思ったほど上がっていないというのは、実はPTA自体がコロナの影響を受けて、かなり行動を制限しながら、やれることをやるという中で、では、サタデースクールと言われてもちょっとできないねと。なおかつ、サタデースクールの中心は地域ということを見ると、実はPTAと地域も、今回いろいろな意味で連携ができなかったというところで問題になったのだらうなという気がしている。コミュニティ・スクールとPTAの活動と、この地域活動・サタデースクールのこの三つに対して、とても大きな懸念というか不安というか、持っているのが、コミュニティ・スクールが始まって、この地域の方とサタデースクールをやってきたことを、今までやってきたPTAの活動の多くの部分が、実はそっちに入れ変わることが想像される。個人的には。日本

P T Aのほうでも、全国クラスでコミュニティ・スクールを進めているので、実はいろいろな情報が入ってくるが、その中でP T Aがどう関わるかということについて、我々の仲間内で今回勉強させていただいて、教育委員会とも情報を共有しながら考えていきたいと思っている。（中野委員）

- ・地域学校協働活動推進事業は、地域学校協働本部というのを作って、推進員を置いて、その人がコーディネーターするというイメージの絵でかかれているが、いきなりそこには行かないという理解でよろしいか。（出口委員）

→まず、学校運営協議会がどういう構成員になるかというところがまだ固まっていない。本来、現状のサタデー運営協議会は、文科省で言うところの地域学校協働本部の役割が期待される部分になっている。ただ、現状のサタデーの運営協議会が、実質、教職員主体の学校もあつたり、地域主体であっても、これはコミュニティ・スクールの学校運営協議会とほとんど構成メンバーが重なりそうだなという学校があつたりするのが実情。現状のサタデー運営協議会には、学校運営協議会と独立した別の体制、いわゆる地域学校協働本部としての役割を担っていただくのが理想だが、学校運営協議会の活動支援部門という学校運営協議会にぶら下がった組織体制ということも考えられるのかなというのが、今の段階の私たち内々の考え方。なので、札幌市にコミュニティ・スクールが導入されたときに、同時に地域学校協働本部がまた別の同類の組織として各地域にでき上がるというのは難しいと考えている。これをどのような形で、コミュニティ・スクールを入れて、その中で地域学校協働活動を一体的に進めていくのかということ、併せて考えていきたい。また、サタデースクールからこの地域学校活動推進事業に変わりますというアナウンスは、コミュニティ・スクールとの進捗状況とも合わせながら、令和5年度のスタートの時点では、今までサタデースクールを、一生懸命頑張ってください、育ってきている部分があるので、誤解のないように、気をつけながらアナウンスしたい。（釜石係長）

- ・あくまでもこういう協議会は会議体なので、そこがその協働本部の役割を担うということはないし、P T Aとはまた別の組織だというのは明確で、盛り込むという考え方はそこにはないと思う。だから、その中の関係者が協働本部に関わるということはもちろんあると思うが、下部組織にするとか、一体

的にやるとかというようになると、複雑になってしまって、うまく機能しないのではないかと思うので、その辺は中野委員と一緒に在り方委員会で議論させていただきたいなと思っている。（出口委員）

- ・今日の議題は、地域学校協働推進事業に変わっていくというサタデースクール事業のこれからのあり方、令和5年度はどんなふうに進めていくかということだと思う。ただ、CSが前にあって、サタデースクールというのは、もう歴史が深い。その前から地域の学校と一体となった活動はやっていた、実は土曜日以外にも。その流れのほうがすごく深いし、PTAの関わりとかも、そのスタイルで自主的にいろいろなものに取り組んだりしているというのがある。CSがもう令和6年に導入なのか。（本間委員）

→計画はしているところ（釜石係長）

- ・では、2年しかない。全国的にはもう、コミュニティ・スクールをやらなければならない状況になっていると思うし、もう66.9%、7割近くが、コミュニティ・スクールを何らかの形で取り入れている。政令指定都市の札幌市は取り組んでいない中で、どうなっていくのかなというのは現職のときからずっと気にはしていた。ただ、サタデースクールが少しずつ変わってきて発展していくということは、いずれ、これがコミュニティ・スクールの土台になる大事なものなのかなと感じていた。そして、昨年社会教育委員会議の中でも、平日に事業を拡大していくということで、これは非常にいい方向に向いているなと思った。これが学校に負担になるものではなくて、非常に先のことに、CSを見据えて、いい流れになっていくのだなと思えばよかったが、この2年ぐらいという話を今聞いたので、そうすると、この5年度の活動というのは、この今10%ぐらいの参加率の中で、どうやって浸透していけるかなと。CSはCSで、今、在り方検討委員会ももうできているという話も聞いたので、何か新しいスタイルができてしまって、サタデースクール、今までずっと取り組んでいたものが、何かそれに合わせなければいけない、もしかして自然消滅するかもしれないというような、尻すぼみな形、または、せっかく生かしてきた学校と地域の連携だとか地域の流れだとか、保護者への理解みたいなものが、もう脈々と積み上がってきたものが、そこで断ち切られてはいけないと思う。だから、名前が変わってもいいが、地域学

校協働活動推進事業の中で、CSのあり方がある程度見えていって、そのCSのほうに上手に流れていく、つながっていくような、スムーズな接続というか、その2年間にしていかなければ、多分、CSが急に導入されたみたいな形になって、今までのサタデースクールどうなったのだろうとか、その理解が、学校現場も、もちろん地域も、保護者も、分からないまま、うまくいかない状況になるというふうに私は思った。ただ、CSって学校教育ですよ。社会教育と所管がうまく連携しているのであればいいと思うが、学校教育部がCSをメインにして、今まで取り組んでいたものがサブであって、何となく吸収されていくというものだったら多分駄目だと思う。なので、今までのものを非常に大事にして、その在り方検討委員が、今ここにいる方で一緒の方もいて、この流れもよく知っていると思うので、そこをうまく生かしながら進んでいけばと思う。今も地域の方は、非常に協力してくださっている。学校の校長は、地域の実態、それから子どもの実態、その学校の歴史、そういうものを全て調べて、子ども像や、つくりたい学校像というのをつくっている。もちろん札幌市として、そのもとになるものがあるので、それから大きく外れるというのは、そうない。なので、この地域学校協働活動推進事業を、少しでも多くの学校に、この2年間の中で取り組んでいただいて、この運営協議会的な、地域の人たち、保護者が参加する場というのが、非常に重要になってくると思うので、話し合いをしっかりと、共通したものをやっていくことが大事。そのために、校長はもちろん大事だが、コーディネーターという方の役割というのは非常に大きいと思う。だから、地域のほうに偏った形で学校に何かを要望していく団体というふうな、圧力団体みたいなものになったら絶対いけないし、まず学校を主体にして、その思いを協力してもらおうという形になっていく話があったので、とてもいい方向に今流れているのかなと思うが、ぜひ、この地域学校協働活動、これがこの2年間、何となく移行しているものではなくて、CSに向けての本当に大事な橋渡しの事業だということに取り組んでいただけたらいいのかなと思った。

(本間委員)

- ・私もコミュニティ・スクールというものの自体は社会教育ではないと思っていた。札幌に来て、このサタデースクール事業というのが社会教育としてすぐ

くいい事業だと思っていたので、今回、コミュニティ・スクールに導入されていくようなお話で、まず所管が違うということで、資料1-3の図表の下に学校運営協議会の市の役割というのが、どちらかという、教育委員会と横並びのようなどころが多いところに、今回こういうふうな地域学校協働活動というものを入れるとしたら、やはり地域の方との連携というものが入っていかねばならないので、難しいというか、最初はやはり、かなり考えてやらないと、コミュニティ・スクールが主体のものの中の取り込まれるというのは、せっかくの社会教育事業がもったいないなと思ったところなので、慎重にするべきではないかと考えている。また、先ほどの「育てたい子ども像」、私もこの文章を読んだときに、「育てたい子ども像」という言い方、何なのだろうと思って、すごく上から目線で子どもというか、物のように扱っているような気がして、やっぱりこの言葉は考えられたほうがいいのではないかなと思っている。（高橋委員）

- ・私がやってみて実際感じたのは、実はもうサタデースクールと似たような事業を各学校いろいろやっているなというのがあった。今回、キャリア教育的なことで、子どもたちは車座で囲んで、大人たちの夢を職業人が話すという企画を今やっているが、これをいろいろな職業人にやってくれませんかとやったときに、似たようなこと、結構やっている。それは総合学習でやっていたり、学校に行ってやっている例がいろいろあって、主だったところは実は商店街だった。それはサタデースクールでも何でもなくて、商店街が、学校に対していろいろアプローチしてやっている事業だと思うが、ぜひその商店街にも、サタデースクールという事業がありますよというのをインフォメーションされたらいいかなと感じた。今回私のほうでやるに当たって、実は連合町内会長と、こういうことをやりたいがいいでしょうかという話も、前段でやったが、サタデースクール事業が何かというところからの説明から始まった。これを考えると、やっぱり地域と学校、という話であれば、学校からアプローチというのが今までの流れだったのだろうが、むしろ学校の負担を考えると、地域から学校にこういう企画があるというふうに持っていかないと、学校の負担は減らないと今回感じたので、さっき言った商店街と、連合町内会レベルがいいのか、まちづくりセンターなのか分からない

が、その辺りに、こういう事業をやっているの、地域の方々、どうぞ学校にアプローチしてはというインフォメーションされたらいいのかなと今回感じた。（中野委員）

- ・サタデースクール事業の定義とか、いろいろなものが一旦整理されなければならないかなと思った。サッポロサタデースクール事業は、将来的なCS導入を見据え「地域学校協働活動推進事業」へと移行しますと書いてあるが、その前にやっぱり丁寧な議論が必要なのではないかな。先ほど育てたい子ども像というのが大人目線からというふうな指摘もあったが、育てている親御さん、それから、育てている子どもというところが、議論の中に抜け落ちていると思って聞いていて、文科省の意向やそれぞれの団体の意向もあるのだが、一旦その事業の本来の目的というものをきっちり精査し、そして、社会教育委員としてはどんなことが議論の土台として必要なかを精査するほうがいいのではないかな。（榊委員）
- ・コミュニティ・スクールでどんな人を委員として選ぶのかというところがとても大事だが、よくあるのは当て職で、建前上で人を選ぶということがある。やはりサタデースクールだとか地域学校協働推進事業をうまくこのコミスクにコラボさせていくためには、当て職ではなく、今サタデースクールに関わって頑張っている人たちは、子どもたちに対する思いをしっかりとっておられるので、そういう人たちを委員に入れるということも、考えていかなければいけない。今までの話を含めて、関係性を整理されていかないと、なかなか現場が混乱するのかなと。それは在り方委員会の議論を含めてだと思いが、最終的なこんな姿はあるが、過渡期として、この二、三年はこんなことでやっていきたいと思います、コミスクの導入も一遍に全部ではなくて、年度ごとに計画的に入れられるので、恐らく、遅いところはまだ四、五年あると思うので、そこまでどうおさらいしていくべきなのかなということも含めて、何かイメージできるような整理というものが必要と感じた。（出口委員）

協議事項 2

「学びに対する無関心層にどう働きかけるか」について

ア 事務局から資料 2 協議資料「学びに対する無関心層にどう働きかけるか」及び

参考資料を用いて説明（村上課長）

説明要旨

①札幌市図書館情報館の特徴について

- ・「はたらくをらくにする」をコンセプト
- ・「WORK」「LIFE」「ART」のエリアに分け、分野ごとに独自の本棚づくり
- ・司書だけ出なく関係機関を連携した相談等

②視察を踏まえた意見について

- ・学びや生涯学習ということで構えてしまうのではなくて、それぞれの興味関心を深めたいと思ってもらえるような工夫やきっかけづくり、こういうことが必要ではないか
- ・学びや生涯学習ということで構えてしまうのではなくて、それぞれの興味関心を深めたいと思ってもらえるような工夫やきっかけづくり、こういうことが必要ではないか等

③ご意見を踏まえて

- ・学びに無関心な方々に働きかける有効な方法について御意見をいただきたい
- ・現状の札幌の図書館、区民センター、そういった施設の状況を踏まえ、どのような仕掛けや工夫、あるいはサポートというのが有効なのか、ぜひ具体的なアイデアをいただきたい。

イ 主な意見・質疑応答

- ・図書館なんかでいろいろな講座を見ると、最初から無料のものというのも結構あるが、これは何か当たり前で無料だなというようなところもあって、人々が求めているのは、少し価値があるとかお得感みたいなものが、きっかけとしてはいいと思う。結果的に身につくものが充実したものであれば、もう少し人々を一步踏み出すような工夫というか、ああ、そうか、これは本来8,000円する講座なのだけど、1回目お試し講座があるみたいなことをすると、結局、どんなものかというのを最初は経験してみないと、そこに6,000円だとか8,000円出す価値があるのかというのが分からなかったりするんで、もっとこちらから積極的に人をとっていきぞみたいな、学ぶ人を集めるぞみたいなもの、人々のお得感みたいなものに訴えるみたいなこ

とを努力されたほうがいいのではないのかなと思った。（臼井委員）

- ・NPOとしていろいろなイベントとかをやってきたが、学びに無関心というよりも、情報を得られないということのほうが多いと思う。うちはSNSを結構使っている。そのSNSも、ツイッター、インスタ、ライン、フェイスブック、それは、全てやっているというのは、幅広い年齢層に配信ができるように。子どもたちの話を聞いていると、今、若い子はT i k T o kで、インスタが主体、あとは中学生ぐらいがツイッターとか、そういう年齢層別の配信だとか情報を届けていくのがすごく必要なのかなと思う。子育て家庭を孤立させないためにも。子育て家庭はほとんどスマホでSNSから情報を得ているのだと思う。あと、高齢者の孤立というと、連合町内会や町内会単位で配信を強くしていったらいいのではないか。そうやって、本当に配信の方法を巧みに使えるようになっていくと一番なのかなと思う。（安田委員）
- ・私は、無関心というより、きっかけがなくてどうしようかと思っていた人間の一人。マンションの掲示板にあったのを見てボランティアを始めた。近くに社会福祉協議会というところがあって、無償でいろいろな講座があったので、そこに入っていろいろ習うと、またそこからボランティアにつながるということがあったので、やはり配信というのは大事。（高橋委員）
- ・やはりそういったきっかけというか、どういうことで情報を知ること。「広報さっぽろ」が、やはりシニア層には、読んでいる方が多くて、あれの効果というものは非常に大きい。あと、地元のフリーペーパーにいろいろな活動やイベント情報が出ていて、そういうのを通じて知るという方も結構多い。SNSも含めて、全部やったほうがいいということではないが、ただ、その情報媒体の先にある、ターゲットというか、層を思い浮かべながら、いろいろやってみるのがいいと思っている。（鈴木委員）
- ・今回、サタデースクールで、職業人に声かけをして気づいたことがあって、私から見ると、違う職業やっている方はみんなプロフェッショナル。誰でも先生プロジェクト的な、要するに、教わるよりは教えるスキルを持っている人たちがいっぱいいると思う。サラリーマンでも、人のつき合い方とか、満員電車の乗り方のテクニックとか、そんなのでいいと思う。そういう、誰でも参画できるプロジェクトというのがあったらいいなと思っていて、いろ

ろな学びの場という、それなりのスキルのすごく高い教授とか何か、いろいろな経験を持った人が先生になるというのではなく、その辺に住んでいる、近所の人たちが本当に車座になって、自分のやってきた商売のことでいいし、そういう場を設ける場をつくっていただければ大変面白いなど。そうするとハードルが下がるなどというふうにも感じた。（中野委員）

- ・昔、ご近所先生みたいなのもあった。最初はきっかけをつくってもいいのかなと思っている。札幌版の、キッザニア、あれも大人気。子どもたちは、すごい感性があるので、引っかかる部分があるといい。（鈴木委員）
- ・無関心層というところとかの、様々な体験に興味がないというようなフレーズが結構出てくるが、興味があってもどうにもならないというところもあるのかなと思う。いろいろな勉強をしたいけれども、その環境が余り整っていないというか、ひとりでそこに出向いて行って、ひとりで参加するということのほうが何か大きいのかなというふうに思っていた。それぞれの方の生活背景とか状況を含めた環境づくりのところから、なぜ参加できないのかとか、その背景にあるものみたいのところを探って、合わせた環境を整えて受け入れていくというか、発信して、ああ、行きたいなと思ったときに、何が必要かというところを、資源的なものを考えていけると、まだまだ、いろいろなことを知りたい方はたくさんいる。生活に即した中でいろいろ知りたいことはたくさんあるのかなとも思うので、そのテーマの選定と、その方たちが参加しやすい環境を整えて、高齢者の方だと、通えないとかいろいろあると思うので、送り迎えとかそういうところも含めた、いろいろなことを考えていくといいのかなと思っていた。（一戸委員）
- ・今の意見にすごく賛成した。やはり子育て中のお母さん、お父さんが時間がないというのがあって、行きたいけど行けないというような環境の部分が大きいかなと思った。それで、案だが、一つは、オンデマンド学習とかオンライン学習というふうな、気軽にパソコンとかネットにつないで学習するというような機会があるといいのかなということ。うまく隙間時間を活用し、例えば30分で終わるといようなこと、あと、例えば朝活というようにことも考えられるのかなと思いながら聞いていた。そして、そのテーマ設定も、参加者の方があんなことやりたいとか、こんなのやってほしいというように

テーマ設定にすると、もっと、先ほどの誰でも先生プロジェクトのような形で、教える、教えられるというような関係性から、お互いに教え合うという学びのコミュニティみたいなものを札幌の中であつていけると、より活力のある学びの共同体ができるのではないかなと考えた。（榊委員）

- ・今、流行語になりつつあるリスキリングという学び直し、あるいは、自分が新しい技術を身につける、もう一つスキルをアップさせるみたいな考え方であると思う。自分が学んで、そして、これだけ自分が今の状態、ビフォー、学ぶ前は、いま一つさえなかったけれども、学んで、いろいろ企業の中で認められていって、今はこうだみたいな、そういう事例というのは結構あるので、それをもっと広く知らせていくことというのは大事なのではないかなと思う。つまり、余りにも今、何か、学びましょうというようなきっかけづくりばかりあつて、成功例みたいなものがもっとはつきり見えると。テレビCMだと、このオールインワン化粧品でこれだけしわがなくなったみたいなことをやっているが、その生涯学習版というか、ビフォーとアフターの世界というのを見せられると随分違ってくるのかなと、人々が何のために学ぶのか、結局は自分のためだろうみたいなことが、どこかにはあつたりするので、そこを見せていく、知らせていくということは必要なことだろうと思う。（臼井委員）
- ・学びということと、それから学んだ後の活動につなげるというのが二つテーマにあると思うが、どうしても学びというと、横割りのイメージがある。学校教育だとか、社会人になったら社会人とか。そうすると、同じような人たちが集まって学ぶと、学びやすさとかいうのはあるが、そこから活動に行くときに、同じメンバーだと活動が広がっていかない。だから、活動につながっていくためには、今度、縦割りにしていかなければならないというのは最近思った。どうしても同じ世代、会社であれば同じ会社の人、同じ中にいるうちというのは、なかなか、何々したいという、その「やりたい」という活動が出てこないが、異世代の人、要するに、それをやりたい、興味を持った人が集まると、偶然そこには中学生ぐらいの人や70歳ぐらいの人もいるかもしれない。いろいろな人が混じったときに、自分のどこかで学んできたスキルがそれぞれ生かせるというか、だから、そういうことにつながるような

場づくりというのか。区民センターで従来からあるものは、どちらかという
と横割りの並びになっていると思う。例えば「ちえりあ」なんかであれば、
学習ゾーンみたいなものがあるが、やっぱりほとんどが学生。その情報館
に、朝もちよっと寄ってきたが、あそこのロビーのフリースペースのような
ところにお年寄りが結構いた。ただ休んでいるのではなくて、本や書類と
ノートも持っていて何かしている。その向かいには学生もいた。そして、情
報館の中のほうには、また会社の人だとか、ただ新聞を読んでいる人だとか
がいた。いろいろな人が集う場があそこにあるというのが、とても興味深い
ところ。ふだん、身近にある区民センターや、こういう施設も、お年寄りの
何かサークルの場所というふうなイメージしかないが、そうではなく、いろ
いろな人が集まるので、いろいろなことができる場という、場づくりを工
夫していくと、既存の施設を変えて、自分の学びをボランティア活動とかま
ちづくりに関わる、自分がやったものが何か札幌市のためになっていると
か、いろいろな集まりの人が、その目的を同じにして集まっているので、そ
ういう場づくりというのをどんどん増やしていくことが大事と思った。（本
間委員）

- ・情報があって、ちょっと引かかるものがあれば、この指止まれでもいいと
思うが、何かまた、それぞれの、学びたいというか、興味に応じて、いろ
ろとまたコミュニティができていく。（鈴木委員）
- ・この札幌市図書情報館では「WORK」というキーワードでエリアをつくっ
て取り組んでいるが、どうしても生涯学習と言うと、趣味だとか教養のイ
メージがあって、職業教育になかなか結びつかないところがある。しかし、
我々の時代と違って、これからの若者は、一つの会社にずっといるわけでは
なくて、いろいろな職を転々とするとか、会社を変えるとかという、いわゆ
る自分のスキルアップのために、いろいろ職を変えていくということも考え
られるわけで、その際にやっぱり資格だとか職業教育だとかって、しっかり
受けるということはとても大事で、自分の生活がかかっているから必死に
なって勉強する。だから、図書情報館ではそういった視点で取り組まれてい
るけれども、ここに上がっている中央図書館やほかのところで、今のような
職業教育だとかという観点で興味をそそるようなことが取り組まれていない

のではと思った。生涯学習というと、お年寄りがやっているというイメージだが、本当は、そのスキルアップを目指す若者が一生懸命勉強しているのも大事な生涯学習であって、それぞれが必死で取り組んでいることだと思う。だから、そのスキルアップのために必要な情報だとか必要な教育をどうやって受けられるかとかということ、提案するということが、趣味、教養の生涯学習から、本当に世の中に必要な生涯学習というふうなイメージに変わっていくのではないかなと思って、既存の施設の視点を変えることも必要と感じた。（出口委員）

- ・まさしく職業と職業教育って重要。職業と言わなくても、最近、キャリアデザインみたいな言い方もあるが、広い意味で、今後どう生きていくかということだと思う。大学生なんかを見ていると、就職活動の中で、イメージするとか、やっぱり情報がないということで、イメージだけで就職するが、こんなはずではなかったとか、自分に合っていないとかで、いわゆる3カ月でやめてしまうとか、そういう学生もなきにしもあらずなので、その辺もう少し、情報を伝えていくというか、そういった仕掛けの中で、大人たちが子どもたちに伝えるとか、何かいろいろ仕掛けができてくるといいのかなと思った。（鈴木委員）
- ・学びに対する無関心層にどうアプローチしていくかという生涯学習の観点から、では、学校教育ではそこに何が関連してくるかということ、学校教育において子どもたちが、その後も自分の人生において学び続けようとするようなモチベーションを持たせるだとか、あるいは、例えばどうしても学校教育というのが、以前の狭い学力観でいくと、たくさん正解を覚えて、測りやすい点数を取るための学習から、学ぶことの本質に対する興味だとか学ぶ喜びだとか、あるいは、自分の自己実現のために必要なことを自ら主体的にアプローチしていこうとする姿勢だとかということ、学校教育の間に育てることが、その後、学校教育から離れた後も学びに対する無関心層ではない、自ら学ぼうとする人物になっていくということを願って学校教育をしなければならぬのだなということ、今改めて感じるとともに、それから、自分のキャリアをどういうふうイメージしていくのかだとか、自分の適性をどういうふうに見詰めていくのかだとか、そのために自分はどういう学びをしていこ

うとするのかということの道しるべ、選択肢や情報を与えていくという教育が非常に大事なので、既に生涯学習でどうしていくかというロールモデルを持つような層以外にも、学童の時期から、様々な情報、キャリアに対する情報だとか、あるいはそのロールモデルを見せるということだとか、大人が見せていくことだとか、情報を仕掛けるということが、既にいる無関心層にどう働きかけるかというよりは、今後無関心層にならないように学校教育がどうしていくのかということ、生涯学習につながる学校教育のイメージとして考える必要があるなど感じた。（出葉委員）

- ・私、ふだん、大学生を相手にしているが、実は、全くの無関心というのはいないというふうに思っていて、私のゼミ、結構いろいろ、学生たちに情報を出して、関心ある人、参加してみない？とか言って、いろいろ呼びかけはしている。そういった中で、何か琴線に触れるものがあつたときに、がらっと変わって、やっぱり興味あるものを見つけると頑張ってくれる。大人がびっくりするような、いろいろな動きをする。本当に、何に関心があるかもちょっと分からないところもあるが、やっぱりいろいろ出してみるというのが、非常にいいのかなというふうに思っている。今日、いろいろな方からまた御意見いただいたので、今日もちょっと振り返りつつ、また具体的なという意味で御意見あつたら、次回も3月に予定しているようなので、その辺で、前半出していただいて、それで、その後、まとめる方向で、議論していただきたいなと思っている。ある意味、まとめも、場合によっては委員会開かなくても、少しまとめたものを御提示いただいて、皆さんからまた御意見いただくという形でもよろしいわけですね。（鈴木委員）

→はい（事務局）

7 連絡事項

第4回の社会教育委員会議は、令和5年3月16日の午前10時から11時50分ぐらいを予定して、場所もS T V北二条ビルの6階A B会議室。現在のメンバーでお集まりいただくのは次回が最後の機会。（逸見係長）